

文京区発！自然観察会『セミの抜け殻調査会 in 小石川』報告

地域の力で子どもの生きる力を育む

開催日：平成19年7月28日（土）10時～12時30分

場 所：東京大学小石川植物園

参加者：小学生 22名、中学生2名、保護者 10名、

ファミリー・サポーター：4名、NPO スタッフ：2名、インターシップ大学生 1名

自然観察指導員： 7名

文京区観察会には、インターシップの大学生がサブスタッフとして参加してくれています。今回は、文教学院大学からのインターン生、外国語学部3年生の高橋朋子さんからの報告です。

7月28日（土）、この日の最高気温は33℃。じっとしていても汗をかいてしまうほど暑い日でしたが、『セミの抜け殻調査会 in 小石川』は子どもたちのたくさんの笑顔とともに終了しました。今回の参加者は子どもと大人合せて30名ほどでした。受付完了後、子どもたちの中には我慢できず、近くの木で早速セミの抜け殻を探し出す子どももいました。セミの抜け殻と言えば、私が参加者の子どもたちと同じ年齢のとき、よく家の向かい側にある神社に行っては抜け殻を夢中になって探していました。子どもたちを見て、そんな懐かしい記憶が私の頭をよぎりました。

調査会が開始して、まず驚いたことは植物園の奥へ進むほど涼しくなっていくということです。自然の風はやさしく、とても気持ち良かったです。そして、何よりも驚いたことは、子どもたちの集中力と観察力です。その集中力に、参加された保護者の方も驚いていた様子で、「この集中力を勉強のほうに向けて欲しいわ。」と仰っていました。まだ梅雨明けしておらず、セミの抜け殻はそんなに多くは発見できませんでしたが、アブラゼミ・ニイニゼミ・ミンミンゼミ・ヒグラシなどのセミの抜け殻を発見することができました。また、羽化しきれず殻に入ったまま死んでしまったセミを見つけている子が、NACOTの先生に興味津々といった様子で質問をしていました。聞けば、セミは成虫になるまで幾多の試練を乗り越えなければならないそうです。

例えば、地中で孵化した幼虫は、モグラなどの天敵に襲われて成虫になれずに死んでしまいます。セミの抜け殻集めが終わり、集計が始まりました。どの子どもたちも、セミの種類やオス・メスの見分けに苦戦していましたが、NACOTの先生方から指導を受けながら集計表に記入していました。集計の結果、ミンミンゼミとアブラゼミの抜け殻が多く見つかりました。場所や時期によって、セミの種類や数も変わるそうです。

今回、調査会に参加させていただいて、改めて自然の力のすごさを感じました。都会の雑踏の中では、セミの鳴き声は聞こえてくる音の一部となってしまいましたが、今回の調査会のように自然の中でセミの鳴き声を聞くと、「あっ、ミンミンゼミだ。」だとか「今セミが3匹くらいいるかな。」のように普段気がつかないことに気づくことができます。最近、家の中でゲームなどをして過ごすことが多くなった子どもたちですが、調査会のように動植物に実際に触れ、いろいろなことに気づくことは、子どもにとって、とても大切なことだと実感しました。

